

「画面」から「紙面」へ

文学部 英語英米文学科 田中 和也

私は文学部内のいわゆる「英文科」と言われる組織で勤務しているわけですが、そのため家族や友人たちからは「研究者」とか「研究職に就いている」とか言われることが多いです。ただ、もともとは高校の英語の先生を目指していました（「大学4年間だけではなくて、何となくもっと勉強したい」ということで大学院に入って、今に至ります。思わぬことで人生が決まったと感じます……）。そのせいか、正直なところ今でも自分のことを「研究者」ではなくて「英語教師」と考えていて、自分の役職（准教授）を見るとひどく落ち着かなくなる時があります。そこで今回は、大学の授業の場で感じている、ささやかな話、とりわけて辞書に関する雑感を申し上げたいと思います。

外国語を担当する教員ということで、やはり辞書を使うということは欠かせません。記憶の限りでは、辞書を使わなかった日は、少なくともこの20年間では存在しなかったと思います。お盆や年末年始も何か英語に触れますし、出張中の飛行機や新幹線でも、読書や機内放送で気になった英語は、電子辞書で調べてしまいます。私が関西を離れて熊本に来た時も、自宅や研究室の荷解きで真っ先に出したのは、辞書類でした。電子辞書なしで外出すると、正直焦ってしまいます。電子辞書には、英和辞典、英英辞典、和英辞典、コロケーション辞典、類語辞典と入っていて、とても便利です。これ無しには、授業の準備や、論文を書くことはできません。

ただ面白いのが、電子辞書を使うたびに、「やはり紙の辞書には勝てないな」と感じるということです。これはなぜかという、電子辞書の小さなウィンドウでは、見られる情報が限られてしまうからということですね。この結果何が起こるのかというと、「単語の全体像＝イメージが分からない」ことや、「語法や文法がわからない」ということです。これらはともに非常に重要なことで、端的に言えば紙媒体の辞書の仕組みが分かっていないと、電子辞書を使うのは危険ではないかとさえ感じることもさえあります。

「語の全体像が見えない」とどうなるかということですが、簡単に言えば「ある英単語＝ある日本語の単語」のように、日本語と英語が1対1対応しているように考えてしまう危険性があるということです。たとえば、次の各文はどのように

考えたらよいでしょうか。いずれも“fast”という語が出てきています。なお、以下の各英文は、断り書きが無い限りは、ウェブ上のロングマン英英辞典 (<https://www.ldoceonline.com/>) から引用してきています。

(1) He's one of the fastest runners in the world.

(2) The subway is the fastest way to get downtown.

(3) She climbed the staircase cautiously, holding fast to the rail. (これのみ、COBUILDから引用。 <https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/to-hold-fast>)

初めの(1)と(2)ですが、一見わかりやすいようでいて、不思議な点があります。(1)は分かりやすいと思います。これは「速く走る」ということで、「動作自体が速い」ということですね。(2)も「町の中心部にはやく行ける方法」ということでわかりやすいと思います。ただ、この“fast”は、よく見ると少し不思議な感じがします。実際に速く動いているのは「地下鉄」“subway”のはずなのに、「手段」“way”を修飾しているからです。手段というのは抽象的な概念であって、「走る」のように何か目に見える、物理的な動作や物体ではありません。けれども、「電車が速い⇒この手段は速い、時間が省ける」というように、ちょっと横滑りする形で“way”に用いられているわけですね。このように考えてみると、“fast”という慣れた単語一つでも、人間による“ものの見方”を反映していることが分かります。

問題は(3)です。これは私が高校時代に初めて出会ったときには、「???’と混乱してしまった表現です。「速く握る」というのでは、よくわかりません。そこで困ったので英和辞典(当時は電子辞書は持っていませんでした)でこの“fast”を調べました。すると、「しっかりと」という意味が出てきます。つまり、がしっと手すりを掴んでいる、ということですね。ただ、同じ単語に「速い/速く」と、「しっかりと」とが混在している、これはなぜか。当時色々と考えたのですが、例えば非常に速く走っている車や新幹線は、それに見合うように、確固として「しっかりと」エンジンを回す必要があります。つまり、「速く」走るためには、「しっかりと」機械あるいは身体を動かす必要性があるわけです。これが理由ではなかろうかと推察したのです。実は大学に入ってから知ったのですけれども、私のこの推論と同じようなことを、ヘンリ・ブラッドリ(Henry Bradley)という英語学者が述べていました。ブラッドリの本を読んだときに

は、人間は考えることは同じなんだな、自分の考えと感性はあながち間違えではないのだな、と嬉しくなったのをよく覚えています。

上述のように(1)–(3)を考えてみると、“fast”は単に「速い」だけとは限らないということがあります。そうではなくて、「しっかりとした」⇒「速いものはしっかりと身体やパーツを動かすことで作動する」のように、単語には意味の全体的な連想イメージやネットワークがあるということです。そう考えてみると、「fast = 速い」のように、意味を異言語間において1対1対応で考えることには、どうも無理があるということが分かってきます。

このように、一見したところ「？」である(3)の例文の“fast”も、この単語の全体像をつかむためには不可欠なものなのです。ところが、この語義を知らなかったり、あるいは実際に見たときにどのように訳したらよいのか、というのが分からなかったりというケースを、多々目撃します。これはどういうことなのでしょう。上記のようなロングマンやコウビルドのように、世界中で用いられている英英辞典でも、(3)の意味は載っています。そう考えると、この意味は、決して珍奇なものではないはずなのです。

実のところ、(3)の意味を知っているか、あるいは知らなくても調べられるかどうかという点には、電子辞書と紙の辞書との違いが大きな理由だと考えられます。電子辞書は手軽に速く語を検索できるという強みがありますが、最大の問題は「画面が小さい」ということです。もしも電子辞書で上記の(3)の意味を調べようと思えば、かなり画面を scroll down しなければならないはずです。これは皆さんの胸に手を置いて考えてほしいのですが、電子辞書で単語を調べるたびに、きちんと最後まで読んでいるでしょうか。恐らく、わりと初めの方に出てくる語義だけを見て、「これでいいや」となって、それを教科書やノートに書き込んで終わり、ということが大半ではないでしょうか。そもそも、画面を scroll down するにはかなりの時間がかかります。正直なところ、私が高校生だった時代と比べると、現代の中学生や高校生の皆さんには、さらに時間がないだろうと推察します。現代の中学生や高校生には、画面をくまなく見ることも大変だと、私には思えるのです。

一方で紙の辞書というのは、紙面を開くと、そのページの全体像が一度に見えます。そのうえで、該当しうる単語の意味を探すわけですね。これは必然的に、調べた単語の語義をくまなく調べることにつながります。これによって、たとえば上述の「しっかりと」という意味も、自然と目にすることになるわけです。し

かも、辞書を何回も引けばこのような出会いも増えて、「これはどこかで見たな」と思い出しやすくなります。このような「出会い」の回数と質は、どうしても紙媒体の辞書の方が上なのだと思います。

ましてや、紙の辞書で全体が見えるということは、語法や例文が見えるということです。これも、チリも積もれば山となるということで、英語のイメージを身に着ける上で、非常に重要です。たとえば、名詞につく前置詞です。「～への関心」というのは“interest in”と言いますが、何か関心が対象の中にまで入っているかのようです。あるいは「～への態度」は“an attitude toward”（イギリス英語では“towards”）ですけれども、“toward”ということで、態度のターゲットを、点のように指すような感じがします。このような細部を繰り返し見ると、前置詞のイメージが身に付きます。恐らく多くの人を感じていらっしやると思いますが、前置詞は英会話の要の内一つです。会話のためにも、日々の読み書きで辞書、それも紙の辞書をつかうことが、便利だろうということですね。これは他にも、どの語とどの語とが仲が良いかという連語関係を例文で調べるとき（例：「態度をとる」は“take an attitude”のように take を使い、do は使わない）も同様です。紙の辞書だとすぐに例文が見えますが、電子辞書だと毎回例文のボタンを押さないといけません。この毎回押すという作業は、なかなか面倒なものです。

ここまでお読みいただくと見当が付くかと思いますが、実は単語の全体像や正確な情報を掴むためには、電子辞書よりも、紙の辞書の方が速くて確実です。今は出版業界が苦しいとはしばしばいわれますけれども、それでも紙の辞書が日々改訂されたり書店に並んでいたりするのは、このあたりに理由があるのかもしれませんが。新聞でも、電子版が流行する一方で、やはり紙の新聞の方が隅々まで読めるという利点があります。こう考えてみると、紙の辞書と電子辞書との違いは、電子版の新聞や書籍との違いを考えることにもつながるかもしれません。皆さんも、電子辞書やスマートフォンなどの小さな「画面」を見るだけでなく、全体が見渡せる「紙面」にも触れていただけたらと思います。

References

H・ブラッドリ。『英語発達小史』。岩波文庫、岩波書店、1982年。

Longman Dictionary of Contemporary English <https://www.ldoceonline.com/>

Collins English Dictionary. <https://www.collinsdictionary.com/>